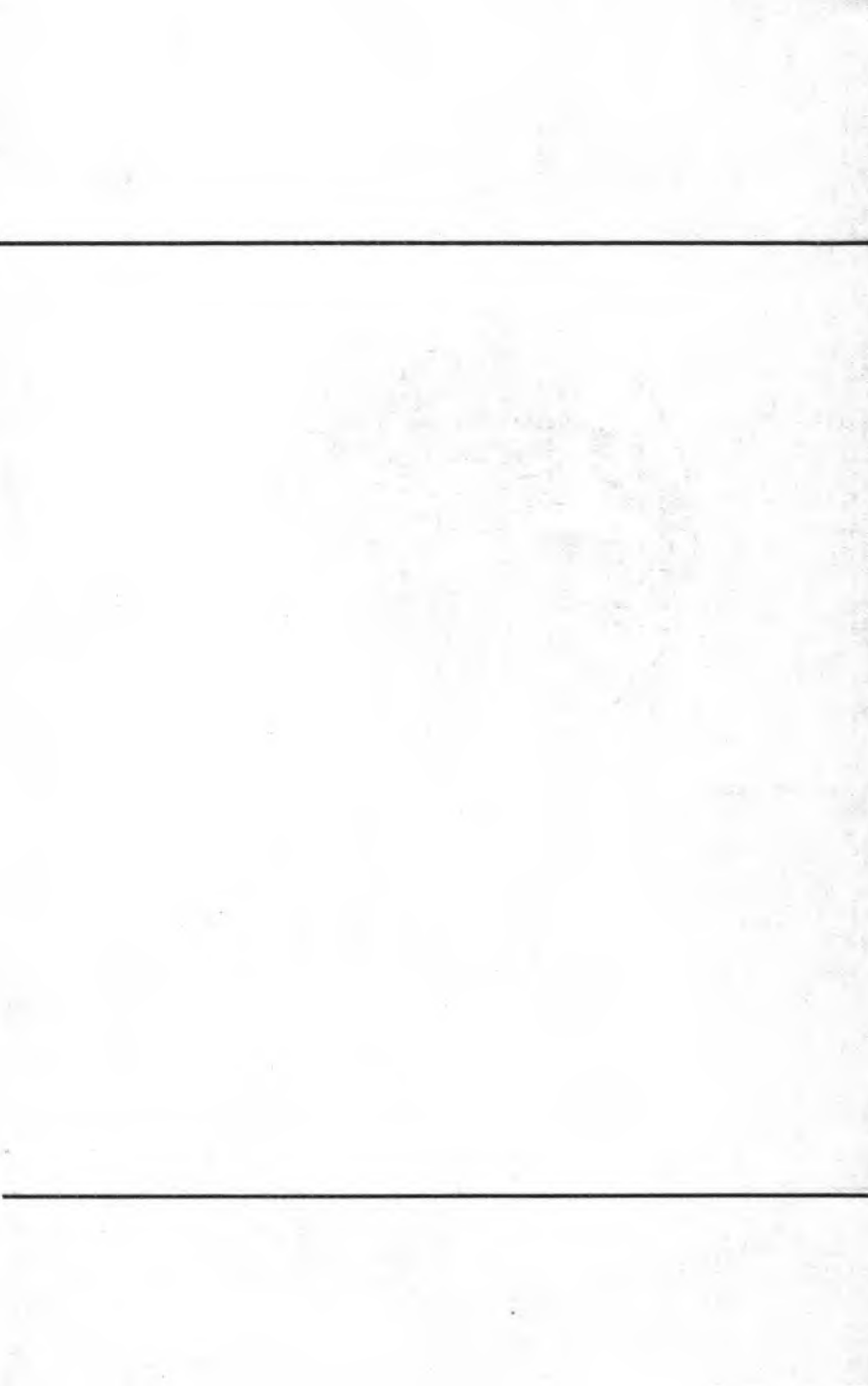


著郎路生麻

# 新川柳詩釋







---

自

序

---

句はその人のところである。十七  
音字はその人の姿である。リズムは  
その人の呼吸である。

この評釋では、不即不離の間に川  
柳の良きところを美しき姿を正しき  
呼吸を紹介するに過ぎぬ。

皇紀2598年9月18日夜

黒龍丸船室にて

著者識

凡 例

★本書は月刊「川柳雜誌」に連載した拙稿「川柳評釋百句」及び「川柳名句評釋」の二篇の合纂で、句數は前者が百、後者が百七十一句、合計二百七十一句ある。

★評釋は所謂評釋でなくて、不即不離のものとした。しかも原句を傷けぬやう心血を凝いだ。

★句は全國の柳誌から拾つた。句主の雅號を左に録して敬意を表する。形水、路郎、有爲郎、菊人、春巢、烏雀、よし江三巴、小刺紅、雅幽、自樂人、明珠、日車、五葉、柘花、沐天、善弘、劍花坊、閑生、青兒、おさむ、三太郎、淺女、大門、文庫、喜由、豆秋、鮎美、丹路、か

ほる、栗、夕鐘、孝輔、幹、葭乃、壽仙  
久留美、曉童、靈子、綠雨、多喜女、巷  
二、正舟、啞三味、盜泉、のぼる、變人  
不二也、由布、橙舍、六文錢、叱咤郎、  
弦月、紅太郎、無冠王、不水、耕朗、  
素明、一兵、默漁老、四塊、豐、昭象、  
三雷波、法外、ライト、沒食子、美知  
夫、有石、戲雀、素豐、六葉、柳風子  
星文洞、愚ン平、夜詩影、東洋鬼、珍茅  
蘆、荷十、比出路、葉光、遠見路、いさ  
む、利生、通夫、鐵心、惣吉、正穗、陽  
出男、山川兒、松花、錦浪、千壽郎、五  
健、東魚、雞牛子、柳秀、久流美、新水  
牧人、久米雄、綠之助、愚籠、勝二、里

十九、春秋、水車、峰月、水魚、機見女  
心府、八步、きち坊、睡花、少女櫻、太  
郎丸、鬼佛、桑南、半竹、柳一、蝶五郎  
愛日、三葉、昭二、水母、言人、九史、  
紫郎、錦魚、亂三、鉢朗、青龍刀、清流  
水華、艸樂、港太郎、山月、語翁、默平  
歌都路、靜豊、一狂、玄六、よしを、高  
峰、緋郎、三日坊、櫻ノ坊、裕侍、晁卓  
夜王、狸兵衛、青藏、房子、山雨樓、一  
八郎、琴の舎、米一朗、天痴人、百雷、

蒼梧樓、紋太、普天、金一郎、雨吉、雀  
郎、周魚、琴人、福造、黃子朗、水府、  
迷亭、半文錢、狂水、松窓、史城、紅壽  
郎、あけ鳥、榮公、苦味平、句沙彌、天  
邪鬼、樂瓢、信子、孝三郎、半里宇、翠  
夢、犇郎、梅月、半象、夢一文、花川洞  
呑風、松映子、二若、なみ江、白舎、柳  
多良、矢咲、紫痴郎、小太郎、歌々坊、  
今雨、川路、宣騒(順序不同敬稱略)

★卷末に句の索引を附した。



川柳評釋百句



一家團欒の後 芝生に新聞紙など

形水

父も母も、チーチーバツバ、チーバツバのお仲間入りをした事であらう。今はただ靜かに雲が流れるのみだ。

元旦だ せめて眼鏡を拭きましよう

路郎

惡戰苦闘の三百六十五日を回顧して元旦の嚴肅さを味ふ。これこそ眞の人生だ。眼鏡を拭いて出直す前途に光明あれ。

移轉して釘と金槌たのしめり

有爲郎

バットをふかしながら、椅子やテーブルの置き場に腐心するサラリーマンにこの悦樂がある。

偽らぬ姿ストロー捨て、飲み

菊人

われは一介の労働者だ。われに初戀の味の魅惑なく、われに茶房のアトモスフェアを満喫する餘猶なし。面倒臭いかなストロー。

ケーブルの一番前に立つ若さ

春  
巢

上昇々々。雲を衝いて上ほる。感興は若さである。

借らぬ氣の家も納屋までのぞいごとく

烏  
雀

電停が近く、間敷が多く、瓦斯水道の利便を考へ、しかも  
家賃が安く、借手の希望に際限はない。

愛だなんてみんな苦勞の前借りだ

よし江

そこまで考へては人生は無味乾燥だ。しか信ずる以上神の愛に永生すべしだ。

曾我廼家に泣く涙あり貸さぬなり

三 巴

一分や二分で首をつらいでもこいひ、心中をする位愛してゐたのなら添はしてやるのにこいふ。人間は遂に人間だ。

初日の出 砂に子の影親の影

小刺紅

大自然の力はすべてを淨化する。子の影と父の影との相交  
錯するところに無限の愛は湧く。

ごうく 醫者も安心立命を説き

雅 幽

生死の問題は醫術の外に横はる。醫者も患者も共に力の盡  
きたところに拵むべき薬すべはある筈だ。

贅澤をしつくしてから虫ご居る

自樂人

富貴は浮べる雲だこ古人も云つた。虫の音は自然の音楽だこ、これも誰やらが云つた。俗世間を遁れて何を求めるかは大きな疑問だ。

寝る時間さへ惜しみなく贈賄か

明珠

歌ひたくもない唄を歌ひ、飲みたくもない酒を飲んで歡心を買はねばならない贈賄が、晝から夜へ、夜から朝へこ續く花街ために黄金の火華散る。

松の内屏風をたゝむ風をうけ

日車

部屋は仄暗く、廊下は黒光る。行儀作法に明け暮れる身が

屏風の風を感じるも憂し。

辭職して何をか云はん植木鉢

五葉

恩給に縋つて死を待つばかりだ。今更何を僕に聞くのだ。

獨りであふれた水の清いここ

柗  
花

口をそそぎ、齒を磨かく、たらたらたらたら  
たらたらたらたら  
たらたらたらたら  
しなく算から流れてつきず、もたいなし山水。

こんな傷ぐらいご指は無かりけり

沐  
天

資本主義、機械禍、そんな文字が私達の頭をかすめてゆく  
生きんがための犠牲、脚や腕がマネキン人形を轉ろがしたや  
うに横はる生活戦線はいつになつたら朗らかになるだらう。



月あれご山あれごいま君は亡し

善弘

生者必滅會者定離。あゝ、寫眞は黙して語らない。多情多恨はよし、されごメランコリーの罐詰いつまでか續く。

輝くや元より金に嫁せし身の

劔花坊

父にも等しき夫の年齢覺悟の上なり、玉の興ミそしらばそしれ嫁して需むるものに千金の綾羅は必然の必か。

氣違ひが私の云ひたいことを云ふ

閑 生

常識圏内に住んでゐるこゝが果して幸福か。こゝ私たちはホントに考へさされるこゝが多い。云ひたいことを云つてゐるやうな氣違ひを前にしては殊にそう思ふ。

定期の切れた申出 長男長女次女

青 兒

「おツ母さん僕定期が切れたよ」「わたしもよ」「アラわたしもよ」こ次ぎ次ぎに手が出る。その母、慕口をのぞいて「定期のお金ならお父さんからおもらひなさい」

## 四枚一組田舎娘の春姿

おさむ

イヤに光つたフオート、しかもテーブルの横に固くなつた  
七分身が想像される。もう少し瘦せて撮りたいのが娘さんた  
ちの共通のなやみか。

## 人一人生む家白く明けかかり

三太郎

緊張し切つたザワメキが一家を包んでゐるが、夜が白らむ  
につれてそれが歡喜の聲に變つてゐた。男か女か、詮索の限  
りでない。

お父さんが病氣ごここかで遊んで來

雅  
幽

會社を休んでお父さんは眠り續けてゐる。病狀はよくないらしい。みんなは足音をぬすんで歩いた。お父さんのネクタイにブラ下がれない子ぎもには元氣がなかつた。

涎掛してもやりたいのろけやう

淺  
女

のろけも發表慾の一つだが、聞かされるのはたまらないといふ顔付きで聞いてやるのも面白いものですよ。

仕舞風呂一本足がこんで来る

大 門

表現は滑稽だが内容には涙がある。特に仕舞風呂をねらつてゐるミこころに。

裝飾になるごは悲し苦心の著

文 庫

堂々たる書棚。堆かき書物。主人はいつも不在勝。

男みなモシヤくくくご悼みけり

沐天

弔するも心そこにあらざればなり、多くはお得意先なるが故なり。名譽職の弔辭も又型の如く悼む。自他それでよしこは悲惨なる滑稽也。

何もかも騰り淋しい皿の數

喜由

食費を削づる夫婦の溜息だ。

皿の數を云々したきて卑しむなかれ。

むかしむかし稼げば樂になりしごか

豆 秋

中商工業者の悲鳴、サラリーマンの憂鬱、みな一つに茲に  
存すだ。瘦馬を憐れむ。

本復をして辛辣な口をきき

路 郎

「死んで慍しかったでせう。死ななくてお氣の毒様でした」  
こいふ姑さんに長生きされたら、それこそ災難。

みな様の食堂にけふ休まれる

三 巴

オイ、何がみな様の食堂だ。乍勝手本日休業の札が莫  
迦に癢に觸はつたらしい。

本心を世間話にして歸り

鮎 美

世間話にした位で感じるもんですか。心臓よ、強くなれ。



かなしみ多く 夫人は歌をよみならひ

丹 路

下手な愀氣はしないこゝ。業平の夫人ではないが、夜半に  
やひこり君の越ゆらんの例もあるこゝだ。世の夫人達よ歌を  
詠め。

借物でないは白足袋ばかりなり

路 生

羽織袴は勿論のこゝ、吋が合つたで帽子も借りる。

たばこぼんつんぼの前に一つあり

かほる

靜に餘生を送る人か。何處かにユーモラスが漂ふ。一人る  
て何をつぶやくかは蕘盆のみが知る。

悩みに答ふ答へてくれて亦悩み

沐天

答へる人は成瀬無極だ。菊池寛だ。與謝野晶子だ。山田わ  
かだ。迷へる羊は更に迷ふ。

靴磨 磨きたい靴前を行く

朶

靴磨の世界には靴が右し左しするばかりだ。泥靴々々、あれ位汚れてゐたら、磨き晴れがするだらうに、アツ行つちまつた。ひつたくツつても磨きたい靴が……アツ又行つちまつた。

施しをして お妾は手を洗ひ

夕

鐘

一ト握りの米がお妾のこゝろをなごやかにした。しかし手を洗ふ別の心をさうすることも出来なかつた。

ドレス着てやつぱり容子して走り

かほる

「なぜ容子して走るんだらう」

「そりやア、女ですもの」

「そうかしら、あれで矢つ張り女かなア」

おちぶれて部屋に餘つた蚊帳を吊り

孝 輔

眼に觸れる限りは過去の華やかさである。現在の物足らなさである。豈蚊帳のみならんやである。

洗濯を途中で呼んだい、便り

幹

「オイ、来たぜく。明六日午前中に来いましてある。これで俺も浮び上れるぞ」

福壽草松にしたがひ候かしこ

葎

乃

柔よく剛を制すか。従來の日本婦人は「松にしたがひ候かしこ」だつたが——今はさうだか。

かしわ屋の女房になつたおそろしさ

毒 仙

次ぎ／＼に殺されてゆく鶏を見て、これが渡世だ——こは  
思へない女房である。

煽風機今度お前の方へ向く

久留美

右したり、左したり、サラリーマンたる彼氏も決して樂で  
はない。

エキストラバスを一枚宛貰ひ

豆 秋

これでも役者だこいふ誇りを持つてゐるから、あれでも役者かと思はれてゐるこは思はない。

曼珠沙華電車を汽車がおつかける

曉 童

白い雲が山の端にかかつてゐる。百姓は手を休めやうこもしない。

次男 逝く

一と七日二た七日とて秋の花

靈子

次ぎくミ花をさりかへて見ても、矢張り淋びしい秋の花だ。ころのいたみはつるばかりだ。

セルを着て區劃整理の道を行く

綠雨

何ンミか土地株式會社分讓地の杭が青空に聳えてゐる。バスの埃りはここまできごかぬ。



逢ふて來たのに母寒からう寒からう

多喜女

「母親は勿體ないがだましよい」といふ古句があるが、母親の方からだまされてかかる盲愛ぶりだ。女よ、多幸なれ。

鼻唄で出來た棺桶ごは知らず

巷 二

凡そ商品と名のつくもので、棺桶位商品らしくないものもあるまい。大きさを一號、二號と呼んでるか、さうだか。

どこへ行く人がテープを持ちもせず

正 舟

果てしなき人生の旅に、何んのテープぞこ悟つてゐる譯でもあるまいに。

本當の散歩へ子供ついて來ず

啞 三 味

三輪車になるか、繪本になるか。子ぎもは犬のやうにかぎわけることが巧い。本當の散歩だこ知つたら、もうそこらには居ない。

ちと古い頭を持つた知事夫人

盜泉

浮草稼業のベターハーフだ。行く先きくで婦人會の會長さんに祭り上げられる。うっかりしたこゝは云へない。すべては型の如く型の如くだ。チト頭の古いのに不思議は無い。

新藥を教へに行けば知つて居り

のぼる

僕は常病人だ。下手な藥劑師より詳しいのも不思議はないだらう。

集金を斷りうがひしてゐたり

變人

集金人の後ろ姿のさびしさは自分の心のさびしさだ。病苦を思ひ生活苦を思ふ。

朝顔の鉢へしやがめば兒もしやがみ

不二也

今日は會社はお休みだ。圓卓の上にはトーストにミルク、バットに朝の新聞紙。

味のない蒟蒻もよし花見酒

由布

何はなくとも、酒さへあればの口か。階級の低いこどもおのづから描出されてゐて面白い。

一本の外はごうでも良いテープ

橙舎

棧橋は見送りの人、人、人で埋まつてゐる。海外航路のX  
Y丸はテープの波だ。

一步一步一歩一萬二千尺

六文錢

富士の踏破も裾野の一步からである。努力々々。

死ぬまいと手を變へ品を變へて死に

叱咤郎

ソレ灸だ。ヤレ鍼だ。注射だ。禁厭だ。天理教だ。手を變へ品を變へて見たが助からぬものは助らぬ。自然の法則は誰も破れない。

借りて来た金をチツプにも使ひ

弦 月

タツタ一圓さいふ勿れだ。借りて来た金の脆くもくすれゆく姿の一部―それがチツプだこは誰が知るものか。苦い／＼経験だ。

此の人出みんな生きてる恐ろしさ

紅 太郎

銀座であるか、道頓堀であるかは知らない。人間一人々々の集積、魂の勇躍、考へれば恐ろしくなるのも不思議ではない。

お叩頭した金一封の軽さかな

無冠王

事程左様に大きな金一封であるのも滑稽だ。紅白の水引に墨痕鮮やかな薄謝の文字もうらめしい。

閑人苦有アイフわかもご養命酒

不水

胃が痛む。肩が凝る。一體今日は何をしたのか。生甲斐のないことおびたしい。



御近所へも聞かし催促歸るなり

雅  
幽

それではいつ伺つたらいゝのです。今度は間違はないやうに願ひますよ。催促されてる方の聲は少しも聞へないが、大ていは想像がつく。

産婆悠々湯です水です

曉  
童

経験に経験をつんだ産婆、でつぶり太つた五十過ぎ、せかす騒がず産婦の夫をこき使ふ。

初戀の顔に似て来る人形師

耕  
朗

人形師なる、既にロマンティックである。しかも作るところの人形の顔が初戀の女の似顔なる。ロマンティックの極致といふべきか。

片假名の草ばかりあるバルコニー

紫  
明

チュウリップだ。フリーチャード。アスバラガスだ。アネモネだ。アマリリスだ。バルコニーの隅にはビール壘が轉ろがつてる。

お隣も閉めていよく虫の聲

一兵

今の今まで大きな話し聲が聞えてゐたお隣りも、いつの間にか戸締りをして寝てしまつたのか、もうあかりがささなくなつて虫の聲が一ト際ハツキリに聞えて來た。

教へ子を勧誘員ごして訪ね

文庫

世事に疎い老教師の末路か。たゞへ千圓の保険に加入してくれただしでも責任額へは遙に遠い。

我々の家にあるから賈になり

黙漁老

祖父の代に私の家へ頼山陽が一泊したんだ。その時に書きのこして行つたのが、この七言絶句の一軸だ。云つても、それを誰がほんまにするものか。

車窓暖か チルチルミチル顔並べ

形 水

車窓には金粉を撒きちらしたやうな春の日射しが躍つてる。そこへ顔を押し並べた我が子たちを「青い鳥の」チルチルミチルに比する詩情の豊さだ。

夏の海もこの廣さこなつて暮れ

四塊

色とりどりの水着で埋まり、芋を洗ふやうな混濁の海だったが、落日と共にビーチバラソルは疊まれ、ケーブの群れもいつのほごにか姿を消してしまつた。ただ飛込臺が黒い影を海へ投げてゐるばかりだ。

孝行をするは無學な兄ばかり

豊

家業は小學校しか出てゐない兄によつて繼承された。そして兄がゆるぎなき家の柱となつた。學のために學をする弟妹の心耳を憐れむ。

妻の智慧昨日あたりの家庭欄

昭象

紙屑と銀紙と毛糸類と鐵屑とそれらの屑籠が用意された  
其の智慧の震源地は、なあんだ昨日の家庭欄か。

鉛筆の便り不幸な娘を思ふ

三雷波

薄幸と云へば薄幸だが、この種の不幸は半ば娘の罪に歸せ  
ねばならぬ。社會面がそれを證據立ててゐる。

我が影に馴れて鰈の帯をこき

法外

人生鰈なる勿れか。丸刈がうつる。瘦せつほちがうつる。

それがみんな自分の影だ。欠伸をすれば欠伸の影だ。馴れては何んの變哲もない。そろ／＼寝るこせう。

月給は違ひ娘は同い歳

ライト

課長の娘も十九だ。部下の娘も十九だ。だのに月給は違ふ  
違ふ、まるで違ふ。何處で何う違つたのか。考へない方がい  
ゝだらう。

ポートルアップ組に連らなるうちのぼん

没食子

あまつたれのうちのほんも、そろくテイルームの味を

知つてポートルアップ組の末席を汚すやうになつた。そしてポ

レロがぎうの斯うのこ云ひ出した。

## 誘惑のあんな男に名文句

よし江

果してごんな名文句か知るよしもないがタイプライターで  
うつアイラブユーでないこみだけは確だらう。あんな男は  
ごんな男か、蟹は甲羅に似せて穴を掘るこいふが。



## 女中より犬が大事な家並ぶ

美知夫

部長級、支店長級の住む住宅地帯、戸別に犬を飼ふ。犬のための肉、犬のための散歩はあつても、女中のためのソレはない。少しく考ふべし。イヤ大いに考ふべしだ。

## 幼稚園行を見送る一家無事

大門

赤い屋根、蒼い屋根の門口に立つて「タ・カ・コ・チャン」  
と叫べば、「ハイイ」と答へるそれは實に甘い音楽だ。幼稚園  
行きの子を見送る一家を祝福する。

出世していよいよこれぬ國訛

有石

訛は國の手形だそうなが、出世していよくこれぬ國訛の  
代表者は大臣閣下だ。

ほ、笑を忘れた様に守衛老け

戯雀

百姓が嫌ひで巡査を拜命した彼だった。巡査を退めてから  
守衛に拾ひあげられた彼だった。彼の人生も既にゴールイン  
に近い。

プロフ井ール ガンヂーに似て羊ゐる

路 生

イヤ、ガンヂーの瘦身矮驪、超世間的な顔半こそ、羊の横顔ではあるまいか。作者のメスは鋭い。

ゴシツブへ處女であつたりなかつたり

素 豊

處女だ。半處女だ。イヤ非處女だ。頻りにゴシツブが飛ぶ。

閨秀作家もそれを問題にされる間が花だ。

背の低い一人は日本大使なり

六葉

威容堂々云ひたいが、背丈ばかりはさうにもならぬ。小村壽太郎なんかいゝ例かも知れない。山椒は小粒でもヒリリと辛い。まさにその通りだが、句には一脈の滑稽味がある。

ハンドバッグ迷へる心バチつかせ

朶

買はうか、買うまいか。要はそれだけだが、ハンドバッグをバチつかせる女心があり／＼讀める。

強盜が見てゐるやうに金庫閉め

柳風子

金庫は音もなく閉ざされた。あたりに氣を配りながら、回轉符號を幾つ廻はして幾つ戻した。その上にまだ人が見たら蛙になれと云ひたそうだ。

素晴らしい儲けを藝妓聞けばかり

星文洞

お座敷に侍んべつてゐるミ「こゝでピンミハネたら、何十萬掬ふ」ミいふ話をよく聞かされるが掬ふたのか掴みそこなつたのか、おこほれを頂戴したためしが無いのが藝者だ。掬つたが最後わたしたちを相手にして下さらないのかも知れない。

## 七日過ぎ出したから来た年賀状

愚ン平

大臣から賀状が来た。急に自分が偉らくなつたやうな気がしたが、考へて見れば、こちらから出したから来たのに過ぎぬ。それも書生の代筆だ。ああ。

お困りでせうご世間は言ふただけ

夜詩影

セルフヘルプだ。依頼心を捨てよ。自分の味方は自分の外にはない。最後は自分だ。自分の努力だ。七轉び八起だ。

法律を一人知つて、角が立ち

東洋鬼

民法第何條が何を約束してゐるやうが、それを持ち出して何になる。徒らに顔面筋を硬化させるに過ぎない。法律は何處まで行つても割り切れない。解決は死あるのみ。

バス嬢の嘘空いたのがすぐきます

春 巢

満員、満員、次ぎのバスも次ぎのバスも満員だ。ボタンをドアを閉めたバス嬢の聲は朗らかだ。「すいたのが直ぐまゐります！」

## 身の廻り眩しく教祖御簾の内

珍茅蘆

教祖といふも包装の美であり、偶像の價ひである。教祖を天日に曠せば、天理教のおみき婆さんとなり、大本教のお直婆さんとなる。近くは人の道教團の御木某。

### こうなされませご死人の掌を合せ

荷 十

「随分ご苦勞をなされましたね。もう極樂ですよ」ご死者に對しては敬虔そのものだ。靜に掌を組み合はせてやつて、南無阿彌陀佛々々々々々々。



## 都會人エスカレーターでも歩き

句沙彌

茶根譚は他人に一步譲るこゝによつて人生行路の醍醐味を指教してゐるが、都會人はこれに反し常に他人を排し、一步先んじるこゝによつて鬭争意識を満足させてゐる。時代は移るの感が深い。

## 看護婦の戀か疲れか窓に立ち

柳 秀

夕焼け、白衣、眼下の緑樹これだけでも、既に一篇の詩だ  
誰か知る看護婦の胸の悩みを。

## 病人の方が氣にしてゐる晦日

比出路

ガツチリ働いてゐてさへ赤字の連続だ。だのにこの病氣ではやりきれまい。いつそ死んだ方がましだ。病人は云ふ。「なあにそんなことは心配しない方がいゝよ」こは云ふものゝ聲に力がない。

## 病氣には勝てぬ横綱ばかりゐる

葉光

人間は病の器さいふ。幾ら横綱でも、病氣三四ツ組に組んでは、押しも、投げもきかぬ。休、休、休、休が番附に並んでファンを淋みしがらせる。(終)





釋評句名柳川

子に甘く妻にも甘く子守する

遠見路

よきパパであり、よきハズであらんとするには常にこの覺悟が要る。しかしです、あまり見つこもよくはない。

電球を代へに四男と三男と

いさむ

一讀、子澤山の家が思はれる。自動車に心を奪はれながら黄昏の街を裏切るいさけない兄弟の姿が眼に見えてうれしい句である。

樂隊の太鼓はいつち馬鹿に見え

利生

伴奏樂器の中でも太鼓がいつちのんきさうだ。大方、からだが隠れてしまふ大きな太鼓をマの抜けたやうに時々打ち鳴らしてゐるさまは見つこもいゝ圖ではない。

一人酔うて三人乗りおくれ

通夫

三人の一人が悪酔ひをするに「君もう大丈夫かい」を肩を貸してゐる悪友の一人が聞く。「スツカリ出した方がいゝぜ」  
と他の一人がいふ。

ミスく乗れる郊外電車の後姿を見送りながらも、矢つ張り酒は忘れられないのである。

あの方ご思ふお人の疑獄沙汰

沐天

今の世は眞逆かご思ふ人さへ、引張られるように出来てゐるのである。正直ご阿呆ご同意語であつたりするのである。おそろしいごこちである。

敢て冒険をなすにあらず硝子拭き

大門

八階の窓から半身を乗り出し、見てゐる人をハラ／＼させる硝子拭きも生きんがためである。食はんがためである。

呑むだけが能ですご妻こきおろし

鐵心

ホントにうちの人は呑むしか能がないんですの。迎も朝寝坊だし、夜更しやだし、うちのここなんか、ちつこも構つては呉れないんだし聴いてるれば果てしが無い。そんなにイヤな亭主だつたら別れたらよかりさうなものだが。

市電代返すにもめる女連

朶

「アラ妾が出して置くわ」ミ市電の切符を出されて、その儘でおさまらぬのが女氣である。「コレで取つて頂戴」ミ五〇錢玉を出すミ、片方でもつむじを曲けて「そんなもの要らないわ」ミ兩手で押し返へす女性氣質の一風景。



狀袋のように平たくなつて死に

惣吉

呼吸のある間こそ、人間も人間らしいが、浮世の苦勞にさいなまれた人がベチヤンコになつて横はつてる姿は憐れにもみじめなものである。比喩法の上乗の句だ。

ごのバスの券も用意の社交術

喜由

頼まれもせぬのに「もう切りました」ミバスの券を無闇に出したがる男がある。ソレを社交術ミ心得てゐるのであるから面白い。

そんな男に限ぎつて料理屋の拂ひには尻込みする。ソコマでしては社交上失禮だミ心得てゐるのであらう。

店先の紙屑主人足で寄せ

正穂

主人さいふものは兎角こまかいまこへ氣がつく。いつそ叱られる方がまだご思ひながら、主人が足で寄せてゐる紙屑をうらめしさうに眺めてゐる店員の心境までがありくご讀める。

大部屋のまゝで婚期はごうに過ぎ

陽出男

好きこそ物の上手なれまばかしも行かない。好きで飛び込んだ女優生活ではあるが、既に婚期も過ぎてゐるのに大部屋組の一人まは餘所事ながら氣の毒だ。

## 女事務焼増代を出すご言ひ

山川 兒

「ホントによく撮れたわ」は女事務員の心のうちの言葉である。その心が言葉となつてあらはれたのが「焼増代を出すから、もう一枚焼いて頂戴よ」なのである。頼まれた男、ニヤリ〜。

## 婦人科へ來るご亭主はかまこまり

松 花

婦人科へついて來る亭主はさ氣の利かぬものはない。隅つこで小さくかまこまつてゐるより外に、てだてがないのである。弱き者よ汝の名は男なりである。

盛装へ何をひがむか撒水車

浅女

美しく着飾つた人の方へワザミ撒水車が近寄つて行く。フ  
エルト草履が逃けてゆくのを見目にかけて、バラバラミ水を  
撒く。俗世に拗ねたひがみ心も見られても仕方があるまい。

貯金帳筆筒の奥の奥へ入れ

錦浪

もう五十錢で拾圓になる。もう十三圓で百圓になる。貯金  
帳にはさうした人知れぬ楽しみがある。それだけに、貯金帳  
ばかしは人に見られたくないので筆筒の奥の奥は愚か疊の下  
に隠くしたりする。

## 夏の夜の書齋スタンドだけ灯り

千壽郎

暑いので、讀書きころではない。ぶらりこ涼みに出かけて了ふ。あきにはスタンドの灯だけが静に夏の夜のしじまをまもつてゐる。

## 金言の通りにやるご蹴落され

五 健

正直の頭に神宿るこいふ金言がある。なるほぎ、それに違ひはないが、莫迦正直にそれを守つてゐるこ、いつの間にか同僚に蹴落されてゐるのも今の世の中である。金言も時には死ぬこを知らねばならない。路郎の句に「正直がなんのたしにもならず死に」こいふのもある。

## 簾編み道場程の音を立て

東 魚

バチン、バチンと簾を編んでゐる音を聞いてゐるに、それが道場をつくりださ、感じたのである。連想の面白味である。

## 來年はきつちりご合ふ子供服

荷 十

でぶくの服を着せられた子ぎもをよく見かけるが、こぎもなんて直ぐ大きくなるので、來年になつたらキツチり合ふよご平氣で着せてゐるのを穿つたのである。

選舉違反あの料理屋の灯を思ひ

路 郎

うっかり御馳走になつて、清き一票が汚き一票になつてしまつた。あの料理屋の灯が今更うらめしい。

底のない桶を鶏ぬけてゆき

雞 牛 子

のんびりとした叙景川柳である。底のない桶の中を抜けてゆく姿に、作者の心の平和さが感じられる。

洋家具部腰をかけたが買もせず

柳 秀

こゝはデパートの洋家具部。アラ、ちよつこ、こんなのいゝわね。こ軟かいクツションに腰を下ろしたが、懐き相談をするに迎もく買へつこのない札がブラ下つてゐる。二人は若い。

色戀をささすに刻み二三ぶく

久流美

その昔、自分にもさうした経験があらうのに、徐ろに刻みを二三ぶく喫うて、サテミ鹿爪らしい顔になり、色戀をささす老人の面憎い態度がよく描かれてゐる。老巧の作。



## 挨拶のうるさき人が向ふから

丹 路

一ト月前に貰つた淺草海苔の禮から、先日のお會へ出られなかつたお詫び、それが済むに「お祖母さんが亡くなられたさうでしたが、一寸旅行をして居りましたので失禮いたしました。さぞお力落しでせう。それは幾つ何十でお亡くなりになつても親身の方は別ですから」ミ長つたらしい悔みまで、忙しい世の中にこれは又對手構はず述べ立てる人で、もあらうか。こちらが書生式の人であればあるほぎ、うるさがつてツミ道を外づしてしまうのも無理はない。

## 大食ひの役に立つ日の夏祭

新 水

こんなに澤山御馳走をして腐りやしない？　ミ案じてか、  
るのを尻目にかけて健啖家の顔にほゝえまされる。

もう隣まで寄附帳の聲が來た

牧 人

町内の顔の紳士が四五人、例によつて寄附乞ひに押し歩く  
ソレ學校の改築だ、ヤレ防空の演習だミ財布の口があき通し  
だ。この句「聲が來た」の下五がいのち。

手についた靴墨これも生活か

久米雄

あすの出勤のためにも、將來への希望のためにも靴の先を  
光らすだけの用意は要る。獨り者の小さな溜息か。

人絹のやうな男が跳梁し

没食子

役者のイミテーションのやうな、のつべりこした男前でベ  
ンチヤラも一人前、機會があれば瀆職の末席でも汚しさうな  
男が兎角世間ではのさばつてゐる。それを作者は慨嘆したの  
である。

完膚なく虫に螫されしキヤンピング

閑 生

はやりものを追ふ不用意さを罵りつくした、皮肉な句であ  
る。完膚なくの漢文調こそ痛烈である。

救ひごは金でなければ用がなし

緑之助

「何んミかしてくれ」、「何んミかしてやろ」ミ云つたミころで、それは金で何んミかして欲しいのであり、金で何んミかする積りなのである。阿彌陀も金で光るミ昔から云ふ、あゝ、金のみが光る世の中か。

白いなあ　ちご海水へついてこい

明　　珠

夏休みの日曜か。白い雲が沖に浮ぶ情景もよい。ひた走る三角帆もうれしい父らしい情愛が引きずつて出た一人ツ子。

ノーバンでいけたらいつそ涼しかろ

豆  
秋

誰でも考へるこみを作者は至極のんきに云ひ放つてゐる。

ノータイ、ノーハット、ノーチップ、云く云く云くこ、はやりものを掴まへたところにも人生に對する軽い皮肉がある。

ぼくは病人僕なのぞみもかはつたな

愚  
寵

遠大の望みを持つてゐた筈だつたのに、不治の病に侵されて白いベッドに横はつてからの望みは誠に哀れである。熱が僅に二分下るこみをのぞんだり、せめて御飯が喰べられる日を持つたり、變り果てたる僕ではある。

## 金送る孝行だけは續け切り

勝 二

妻を娶れば子も出来る。その割には月給が昇らないのが現代サラリーマンの悩みである。それでも故里の老ひたるちははへの送金だけはかかさないところに彼氏の心の美しさがあるのである。

## 七十を過ぎても髪の手を云ひ

里 十九

女大學盛んなりしころの娘さんのみだしなみだけは褒めてもいゝだらう。今ぎきの斷髪の娘さん方の夢にも想像し得られない境地ではある。

## 立候補あの演説は俺が書き

喜由

よくある圖だ。演説のロクに出来ぬ男が市議や府議に打つて出るさ、みんなこの手で、金の力で演説草稿を書かせる。肝心の原稿で堂々虹の如き政論を吐いてゐるのが裏長屋に住んで家賃も拂へないみじめな生活をしてゐるものだ。それでるてあの演説は俺が書いたのださ、いふプライドだけは持つてゐるのである。社會の裏を描出した句。

## 機械一臺この一軒が食ひはぐれ

路郎

電車が出来て人力車が滅びた歴史はそんなに古くはない。家内工業でポツ／＼やつてゐるところへ大量生産の機械が發明されるさ、それがために生活の根底を覆へされる悲劇が往々にして生れる。

養うてあげるご言はぬ妻ごなり

雅  
幽

眞逆の時には妾が働いても養つてあげますよご、云つてゐた妻ではなかつたか。それに夫が引續いての病軀から失職したごなるご——譯もなく心細くなつて、貴郎ごうしませうごいふ妻ごなつてしまつた。

葉卷一本寶のやうにしまつごき

春  
秋

ガラにない貰ひものの葉卷一本、それをぶか／＼ふかすほどの心のゆきりがない。いつ迄も／＼机の抽斗の隅に寶物のやうに藏まはれてゐるのだ。バット級であるごきが句外に出てるのも面白い。



ごもかくもかついで歩く銀狐

水車

銀狐さいつてもピンからキリまでであるが、ごもかく人並みにかついで歩いて嬉しがつてゐるさまを見るに滑稽だ。

瀆職の後の検査は茶も飲まず

青児

引張られた後の検査のイヤ堅苦しいこと、お茶も吞まないまるで猫が膾を吹いてゐるやうで寧ろ物の衰れを感じさせられる。

自轉車で急ぐ坊主の稼ぎやう

春秋

自轉車でお經の配達。日に薄れゆく「如是我聞」の値打。

お布施の重さがさうさせてゆく今の世の出家は忙がしい。

怒ごはさびしきものをもつものよ

丹路

ムキになつて怒る。怒らなくても済むこゝに怒る。怒らなくても済むこゝをムキになつて怒つたあゝの寂びしさは堪え

難い。

思出へ一目抜かして編んでゐた

峰  
月

ああ。あのころは……うちの人も若かつたし、ほんまに遠慮がちに私の名を呼んでゐたつけ……ま在りし日の思ひ出に耽り、一ト目抜かして編んでゐるこゝにフト氣づく人妻の姿が髣髴する。

氷ひく音じやきくくご涼しさう

水  
魚

手鉤の尖きに、一寸引ツかけて來た一塊の氷。鋸で眞二つにじやきくく切る。餘所目には涼しさうだが、額からはボタ／＼汗が落ちてゐるのである。

## 大阪の灯はあのあたり天の川

機見女

それは憧れの大阪か。思ひ出の大阪か。よろこびか、涙か  
そのごつちでゞもあらう。作者の心境がクツキリ描出され  
てゐる。

## 男装は足を踏まれた聲を出し

豆 秋

君だの、僕だのミおつしやる男装の麗人。人混みの中で足  
を踏まれた拍子に、突如ミして女性本来の聲を出した「アラ  
しぎいわ、この人ツ。足の指が千裂れチャ、ウ、ワ、ヨ」

肩車されて蜘蛛の巣顔へ来る

心  
府

肩車されてるごもより、肩車してるお父さんの方がよつ

ほごうれしいのである。

「もう降ろしてよ。お父さん、顔へなんだが引ツかゝつたよ」

老の身のこうも並んだ人力車

八  
歩

自動車やバスの運ちゃんに、今更轉向も出来ない老ひの身の人力車が唯一の元手ごはそごろに儂ない存在ではある。

六疊の廣さに團扇一つ落ち

綠 雨

きつちり三片づければ六疊の座敷もひろくこした感じが  
するものである。そこへ團扇一つ落ちてゐるのも風情のある  
ものである。

嫁の屁は怒り自分の屁は笑ひ

きち坊

屁を藉りて姑のイゴキズムを諷刺した句。不用意な嫁の屁  
を姑を姑ミ思はぬからだミ云つて怒り、女のたしなみが、こ  
うのこうのミ云つた姑の顔がさうくすれたか眼に見えるやう  
である屁を取材にしてゐながら、そんなに穢ない感じがしな  
いのがこの句のよさである。

一も金二も金犬は無職だに

睡花

喰べては寝、喰べては寝、凡そ生活難きはさんなこまか  
云はぬばかりの猫の姿に、ほれぐさ美望の眼を投げた友人  
が幾人あつたか知れない。これは又犬に美望の聲を放つて  
るが、さうした人々が必ずしも怠け者だ云へない今の世の  
中ではある。

荷造りのあこは女房が片づける

少女櫻

郷里へ送る何や彼や。さて荷造りの面倒さ。一日のびにの  
びてゐるが、遂々亭主の手を煩はすこまなる。だがしかし  
荷造りがすんだその手にはタオルと湯札があつた。釘は釘、  
縄は縄、古新聞は古新聞とあこ片づけは女房の役だつた。

暇乞主人に襟を直される

太郎丸

主従關係を一概に封建時代の遺物と云ひ切れないではないか。この句の美しい情景を近代人は何んぞ見る。

水門はちつと耐へて冬の底

鬼佛

白い雲が水の底ですこしも動かない。冬の迫力を水門ですこつかりと擱んだ作者の手腕を稱へたい。



目にも物を見せんごすれご金がいり

路生

あんな下劣な奴が幅を利かしてゐるかと思へば勘なからず癢に觸わる。家柄から云つても、學歴から云つても、比べものにはならない筈だ。だのに、だのにまくやしがる度に擡頭するのがプロ意識。

腕力の順に子供は水を飲み

桑南

「次ぎは僕だよ」ミ釣瓶に口を持つてゆく腕白たち。こんなところまで強者と弱者の對立はあるのだ。

借金は何とも云はぬ年賀状

半竹

この句から國木田獨歩の日記が思ひ出された。獨歩は年賀状で五拾錢のこころわりを書いてゐる。ホントに純情な獨歩であつた。しかし世間の人々はさうではない。この句のやうに……。

壁のしみライスカレーは十五錢

柳一

ダミ聲が漏れて來る場末の食堂の情景を髣髴させてゐる。句外にジメ／＼とした街の憂鬱をさへ感ぜしめる。

雨へ耳立て、歸るの歸さぬの

蝶五郎

あまり大降りにならぬうちに歸らねば云ふころ、歸へしきもないので、この雨に歸へる氣なの、いゝえ妾歸へしはしないわ、云ふころこのそれだけである。それだけであるが、人物が躍如きしてゐて捨て難い句だ。

幕間を舞妓は咲いた様に立ち

愛日

芝居を觀に來たのか、だらりの帯を見せに來たのか。三太郎の句に「三人の舞妓三人燃えるやう」云ふのがある。

## 官邸の豪奢公債赤字なり

紅太郎

威力と信用と安心を與へるための堂々たる建築物、それは  
保險會社や銀行ばかりではなくなつた。新聞社然り官邸又然  
りか。

## 火鉢まで來る十能に風があり

三葉

寒さがひしひしと迫つて來るではないか。透徹した頭、靜  
かな生活が思はれる。

石の門夫婦の歳が違ひすぎ

昭二

虚榮ミ纏綴好みが取ツ組んだものか、それとも後添ひか、  
愛情の片鱗すらうかがえない冷たい夫婦を點描し盡くして  
ゐる。

訪問着うちの疊に座らない

水母

この句を一讀した女はクス／＼笑ひ出した。そして「ホントですわ」ミ云つて訪問着ミ疊ミを見比べてゐた。穿ち得て妙ミ云ふ句である。

玄人で立てる餘技あり名士なり

言人

實業家の聲曲、貴族の手品等々々。時に何れが本職であるかを疑はせるものがある。

女房を殴るゝ猫も居なくなり

九史

殺すなら殺ろせ、化けて出てやるから——ミ女房の鼻いきも荒い。イヒヒ……ミヒステリカルな悲鳴。

猫だつてジツミ見てゐられないぢやないか。ノソノソミ腰をあけていつのまにか姿を消したのである。物凄いはぎ冷やかな觀察ではある。

何もかも断る顔のブルドツグ

紫  
郎

顔の批評なんか卑しい人間のすることだ。わしの世界には  
そんなものはひきりも居ないぞ、この句を讀んだブルは憤  
慨するに違いない。人間よ、もう少し謙讓なれ。

大旦那一人へ暮の風呂が沸き

錦  
魚

風呂は沸いたが這入つたのは大旦那一人だ。大旦那一人の  
ために風呂が沸いたやうなものださ、いふ觀察。これだけの表  
現で忙しい暮の情景が浮き出てゐる。

怨念を質屋かまはず藏に入れ

亂三

一篇の小説だ。ソロバン以外にない質屋の性格を無造作にしかも深酷に詠んだところが手柄である。

貧しさは時に罪なき子を叱り

鉢朗

生活戦線で憂鬱はつゞく。罪のない子を叱つて僅に、鬱憤を晴らす。可哀相なのはその子でなくて寧ろ其の父や母である。



人口の過剰の中に俺も居り

青龍刀

人口の過剰は今、世界的大問題となつて登場してゐる。淘汰されてもいゝ自分か否かを意識するところに存在の意義は充分だ云へよう。俺だ、俺だ。

泣きながら女女の道を行く

清流

女三界に家なし古い教は説く。が、近ごろの女は必ずしもそうではない。

食客女房の方に恩はなし

鞍馬

女の居候なら、箒の一つも持つし、茶碗の一つも洗うが、男の方は何一つ手傳つては呉れないし、イヤになつちまうミヅケく云はれたこゝろが、會て居候をした男の頭の隅つこで閃めく。この句の掴み方も面白い。

子の寢言買つてやらない事を悔ひ

水華

買つて買へない事もなかつたが、辛抱が出来れば辛抱させた方が身のためだと思つて買つてやらなかつた。ミころが寢言にまで出たので、それ位欲しいものなら買つてやればよかつた。今更後悔するのも親心ではある。

## 長襦袢女は風邪をひかぬもの

艸 樂

艶姿そのもの、長襦袢の儘女は鏡臺に向ふ。そして相當な時間を消費して顔の造作が行はれるが不思議に風邪一つひかない。作者の爛眼がこの句を生む。

## ボーナスへ借りてる金を寄せてみる

港 太郎

たんまりでもないが兎に角、ボーナスを貰つた。なんだか身うちがゾク／＼する。併し平素足らぬ勝ちの生活をしてるのでいつの間にもやら、あちこちに借金が出来てゐる。ソレをソーミ算盤に入れて見る。ボーナスをみな投げ出しても足りない。思はずあーミ深い溜息を洩らしたサラリーマン氣質が遺憾なく描出されてゐる。

物賣は障子もあけず斷られ

山月

「ゴメン下さい」云ふ聲が物賣りの聲だ、まだ何も云つてゐないうちから「妾のうちでは澤山ありますから要りませんよ」云、もう斷る聲が障子の向うからして来る。

金ですむ事を金持告訴され

話翁

大抵のこゝは金で済む——云金持は思つてゐる。結婚を解消しても貞操を蹂躪しても、人を轢き殺しても慰藉料さへ出せば、それで萬事がキャンセルせられるものだ云心得てゐるが併しなかくその金を出さう云しないのが金持心理だ。

頸筋に見惚れ八階まで昇り

黙平

頸筋の美に、ほれほれさしてゐるひまに、エレヴェーターは、早や終點に着きにけりで、ゾロ／＼／＼と乗客を吐き出してゐる。ホイしまつた。わしは三階の雜貨部に用があつたのださ云つても追ツつかない。

屑拾ひニツと笑つて怪まれ

歌都路

迂濶に顔面筋肉すら動かすここの出来ない世の中になつて来た。

ルーデサツクを見つけたのかも知れないのに……ルンペン氏よ、怪しむ奴を輕蔑してやれ。

兵隊のチツブ財布の底を見せ

静 豊

電車賃だけ残してくれさいふ戦術もあるが、財布の底を見

せた以上、かぎへ出たらたちまち兵隊意識で、ソレ、駈け足

ッ！

スキー服右から二人目は女

一 狂

男か女か、女か男か、一見してハッキリしない姿態が……今の世のすがたごなりそうだ。女は女らしくごか何んごか云はうものなら、あんた頭が陳いわよご一蹴されてしまう。へい僕の頭は生れた時から……ご云つても洒落にもならない。

六錢を貼つて興奮まださめず

五 六

内容はみんな判らぬが、斯うした瞬間をキャッチして、「俺にもそんなこゝがあつたッけ」さうなづかせるこゝろが腕であらう。

春泥へいつそ素足になりたがり

機見女

山は霞むし、こゝろはをざる。歌麿がくの女でなくとも春は素足の女を招く。「ちよつと待つてて」ミ足をくの字に、足袋を脱ぐ、その姿さへ畫になる媚態だ。

家中を笑はす母の流行語

よしを

「向ひの犬、さてもエロやで」さか、「OKだよ」さ「だよ」  
までつけて笑はれるのかも知れない。

親ほごに階級の無い社宅の兒

高 峰

お父さんが課長だつて平の社員だつて、社宅の兒さもたちは無邪氣だ。平の社員の子が大將で、課長の子がただの兵隊さんで、軍ごっこをしてゐる。おツ母さん達はさうはいかぬがネ。



船頭もいいなご思ふ春霞

緋 郎

鉢巻に啜え煙管、帆は十二分に張つてある。船は疊の上を  
すべつてゐるやうだ。寫生句の上乗。

貧乏の子は秀吉をなつかしみ

三日坊

秀吉の家は貧乏だった。秀吉は小さい時には子守をして  
た。秀吉は鼻を垂らしてゐた。それがあんなに偉くなつた。  
私は秀吉が好きだ。私も秀吉のやうになりたいものだ。

新店のそれもすぐ来るやうに言ひ

路 郎

空函で棚をふさいで兎に角店を出したのはいいが、いかにも寒むさうだ。「何はありませんか」を訊かれても、その何がなか／＼ない。折角ある品では、お客様の方で「これではネ」もおつしやる。

閉めた戸が四五寸戻る男の子

櫻 ン 坊

男の子は元気だ。「もう少し静かになさい」をいつもお母さんからお小言ばかり。しかし男の子は、それがホントの男の子だ。

モウシヨンをつけて壽司屋は握つてる

裕

侍

この句を読むと同時に背の低い デツブリミ横幅の廣い壽  
司屋のあるじが、目に浮ぶ。唾こそつけぬが、モーションを  
つけて握るく。まぐろ、蝦、あなご等々々。

箒迄チビて貧しきさせまるなり

晃

卓

古疊に破れ障子、庭でこほこ、暖簾のよれく、何一つ  
貧しさを表象せぬものがない。

一萬圓フフンと云つて草に寝る

路郎

金。一萬圓。それがさうしたと云うんだ。空は碧い。雲は流れる。

むづかしき顔かな金庫開ける顔

夜王

金庫を明ける顔、たしかにそんな顔があるかも知れぬ。嚴肅か否、沈痛か否。寧ろ無表情に近い顔かも知れぬ。この句を讀むと、金に憑かれた人の姿が迫つて来る。

## 晝線の下で水晶の印を刻り

豆  
秋

先づ印判屋の薄暗い部屋が想像させられる。そこには晝線が静かに垂れ下つてゐる。その下で水晶の印を刻る無表情な印判師の顔こそは時代を超越してゐる。

## 螢まで啼いてるやうな虫屋の荷

狸  
兵衛

點滅に蒼白い夜を思はせられる螢の魅力。夜店の灯から少しく外づれた虫屋の荷の中にあつて螢ばかりが、押し込まれてるやうさは想へない。作者の夢のやうな詩境が想像される句。

運轉手 ぞなつただけで無事にすみ

青 藏

俄然、ハンドルが躍動した。「莫迦ッ」ミ呼ぶ運轉手の罵聲。車内の人々はなだれを打つてぶつ倒れた。間髪を入れず死線を越えたのが一人の老婆だった。怒つて見ても仕方がない。まあ無事でよかつたこいふ顔ミ顔、眼ミ眼が語り合つてゐるばかりである。

文化村も良いが海拔千五百

房 子

赤い屋根、青い屋根。緑の丘に白い雲。土地會社の杭がニユーツミ突ツ立つてゐるところもいゝが——豆腐屋へ一里ではネ、その不便さも思はされる。

玩具みな春の夕べの影を吸ひ

山雨樓

なごやかな心境を、美しい情景の中に見るこころが出来る句  
ひの高い句である。

疊替へ座つて見たり寝てみたり

一八郎

イヤにあかちやけた古疊が、蘭の匂ひのぶん／＼する青疊  
ご取換えられた時のよろこびは、自分の家でありながら自分  
の家でないやうな、そわ／＼した氣持に襲はれ、ホンの一寸  
ではあるが落ちつきを失ふものである。

皿の繪の藍蒲鉾に染まりさう

琴の舎

印象的な描寫で、白い蒲鉾が眼に見えるやうである。

二階借前の不埒を聞かされる

米一朗

よく戸締りを忘れるし、火じまひがルーズだし、ソレに誰れだか判らない人を連れ込んで夜遅くまで呑んだり騒いだりしてホントにだらしのない人でした。おしまひには毎日のやうに借金取りがくるし、新聞代まで立換えさせられるので……おこなく聞いてゐれば果てしない。



身の上話へ白粉はげてくる

おさむ

夫の極道ぶりを一トくさり、それから姑にいちめられるいぢめられぶりを小一時間。

歌人 M H の生活

安閑と三十一文字の阿片性

天痴人

昔も今も、歌人には一脈通するノンビリさがある。阿片性  
と揶揄するところにこの句のいのちがある。

この邊へ洋服箆筒置けばよし

百 雷

月給は食ふてチヨンである。ウツカリするに赤字であるサ  
ラリーマン生活に入つて既に三年、洋服箆筒、洋服箆筒の夢  
は果てしなく續くのである。

人の非を發いて淋し佛の日

蒼 梧 樓

人間としての弱さは誰ももつてゐる。人の非をあばいて自  
分の非を悟らぬ俗物の多い世の中で、自分の小ささ、自分の  
弱さをしみるゝ知るこゝはいゝこゝである。

嚏をまごもにうけた梅の花

大門

寒からうご寒くならうご、咲くべく咲いたまでである。  
それが風流か風流でないか梅の花の知つたごごではない。人  
間の愚かさは「オイ風邪をひいては駄目だぜ」ご梅から注意  
されさうである。

知つてるかアハ、ご手品やめにする

紋太

自分自身が世間に疎いごごを知らぬ人物を主材にしてゐる  
だけに、いよくユーモラスな句ごなつてゐる。

冬の農家を平和さなづけたる寫眞

有爲郎

炎天下の草取、きりいれの多忙、非常時の農村の喘ぎ、そんな姿をこの一葉の寫眞からは見るこゝが出来なくて、平和の二字に片づけられてゐるのである。靜中動を想はされる句である。

ごこに行く船か濛々西さして

普天

人生は不可解である。ボンヤリミ船を眺めてゐれば我も又

ごこへ行く身か。

卒業の日に友達の國をきゝ

金一郎

學びの窓に机を並べてゐた人たちへチリ／＼バラ／＼になる日が遂に來た。卒業はうれしいが別れは悲しい。お互ひはすくなくらずセンチにならざるを得なかつた。

浴槽へずらり立つたは皆わが子

霞乃

何ンミかチャンに何ンミかチャン。シャボンの泡の幾星霜。スク／＼のびる子等の姿へ、ホツミするのも無理はない。

貧乏の底に指輪を手離さず

新水

キラ／＼光る紅玉、小さくも愛の象徴の指環、こればかりは、どんなに困つても手離したくないのが女性心理である。

患へば近所にうまいものがなし

雨吉

「何か喰べない？」さう聞かれても、病床では食欲をそゝるものが何一つない。「でも何か喰べないよ、折角よくなりかけてるのに、早く起きられないよ」云はれ、「では驛辦でも喰べて見やうかしら」さういふところか。

踏切で抱けばわが子が猿に似て

山雨樓

危険がせまるミ子猿たちは、ひたぶるに親のからだに纏ひつく。踏切で、ハツミ思つて抱きかゝへた姿をそれに比して滑稽に感じたのであらうか。

何様の社か旅のお朔日

玄六

旅のここきて、何様の社か判らないが、今日はお朔日だな  
アミ思うミ、敬虔な感じにうたれ拜む氣にもなつたのである。

靴下を焦しスキーの歸りなり

かほる

白皚々たる雪の山をのぞんで、行く時の颯爽たる姿に引きかへ、歸途のシヨンボリさが、際立つて目立つのも面白い。

うりぐひの素直に物をくれてやり

雀郎

一つく影を消してゆく、うりぐひは寂しいが、おそかれ早かれ無くなる品だ。欲しいものは呉れてやるさ。この世にさへ執着を持たぬ身が、何んの物になぞ執着があらうぞ。



肺だからよるなと言へば涙ぐみ

晃卓

「あまり近くへ寄るな、うつるから」き云へば「傳染つても  
いゝわよ」き早や涙ぐんでかゝる。愛き愛の火華。

買つてやる風にも親の好き嫌ひ

周魚

あに風のみならんやである。

高商へ行けき親は云ふ。文科へはやれぬき親は云ふ。あの  
嫁貰へき親は云ふ。あゝ親は云ふ。親は云ふ。氣の弱い子の  
前途は暗い。

君雲を話す心になり給へ

鮎美

人間に生れたら、濁流に飛び込んだも同然だ。よく泳ぎ切るもの幾人かあるに云ひたい。右しても左しても、醜惡の壁に突きあたるばかりだ。

幸福のお膳は缺けてゐてもよし

琴人

缺けてゐるやうに、剝けてゐるやうに、差し向ひのお膳に盛りあがつた幸福こそは千金に換へ難い。ねえ、あなた、なんだ。それで萬事はOKだ。

玄關に位負けせぬやうに立ち

福造

堂々たる玄關に位負けすまいと、ふんぞり返つたところが既に、位負けしてゐるのである。それを氣づかないところが人間味がある。面白い。

雑巾の雫をひいて國のここ

黄子朗

青雲の志——それは本の中にあつた字だ。金が何んだ。成  
功が何んだ。平和は反つて故郷にある。あゝ雑巾の雫よ、儂  
は一體さうしたらいいのか。

妓一せいに鮎の骨をぬき

水府

虫も殺さぬやうな美しい妓達が、一せいに鮎の骨を抜いた  
異風景。美醜の對照、馴れつこのおそろしさ、それを觀取し  
た作者の慧眼がこの句のいのちであらう。

三味線もせうこそなしの鳩ぼつぼ

大門

さりこは野暮なお客様も云へず、鳩ぼつぼを弾く。あ、  
三味線が泣く、腕が泣く。

へつらつておもねつてまだ平社員

迷 亭

すまじきものは宮仕へか。靴の紐を結ぶ位は愚かなこと二  
號邸への御注進係りまでつこめて、やつこ首がつながつてゐ  
るこは、社員たるまた難いかなである。

よしんば胡麻にしてもお百姓様様

半文錢

吹けばバツミ散る胡麻、その一粒だに——汗、汗、汗のた  
まものだ。尊きは汗の力か。

民事部に慾をはなれた顔もなし

狂水

結婚解消もいゝが、すぐに慰藉料請求ミ来る。家賃も拂はずに立退料がさうの斯うのミ、こゝもミ浮世ぢやなアの感が深い。

足袋を履く時にみだらな廿四五

松窓

女の二十四五、既に男を知つた艶姿こそは、魅力一〇〇パーセントの風景。男なら——心を動かさずにはゐないだらう。

白粉の下は光陰矢の如し

史城

皺、皺、ちりめん皺。悲しくも又いたましきは現實。水谷

八重子さん、覺悟はよいか云ひたい。

煉齒磨女房の押しした後を押し

紅壽郎

新世帯だネ。圓滿だネ。サラリーの上がるこみに希望を繋

いでゐるんだネ。ねえ、あなた、ぶぶ漬で辛抱して頂戴よの

口だネ。

馬の目ご出合新兵ぎよつごする

あけ鳥

「オイ新米、一體何處を蹴るんだい。無闇に蹴つたからつて、走れるもんぢやないよ」ミ云ひたそうな馬の目に射すくめられた新兵のみじめさがハツキリミ描出されてゐる。

日の永き思へば古き掛時計

榮公

春日遅々たり矣。ああ眠むいく。人間は何故生きねばならないのか。それに答へやうもしないでチクタクミ古時計は時を刻んでゐる。



神様を又取りかへて願を掛け

苦味平

そりやア、石切さんがエ、ミ云へば石切さんへ走り、妙見  
さんがい、ミ聞けば妙見さんへぬかづく。人間の弱いこと、  
ホントにお氣の毒みたいなもの。

錦魚屋に雛妓袂を教へられ

柳 秀

祇園の晝は長閑である。錦魚の美に眼を奪はれる舞子の無  
心な姿こそ京の姿そのものではなからうか。

よこれずにあれご少女をみまもりぬ

天邪鬼

美しき乙女をみまもる人に邪心なきか疑はし。されど、斯く感ずるのが世の常の男ごころではある。ああ。

トラツクに積むご嫁の荷みじめなり

樂 瓢

美は影をひそめて、一枚の油團に過ぎない。一臺の貨物でしかあり得ない。この句見つけぎころの妙味か。

揺れてゐる心秤の目が合はず

信子

揺れてゐるのは秤でなくて、こころだつた。人間のこころはホンの一寸したここにも動揺をまぬがれないものである。

シャツも着て寝るよこ友は年をこり

孝三郎

前途に一脈の希望がないでもないが、それは債券の當籤を待つにも等しいと感じるやうな年になつては總てが物臭さになる。シャツも着て寝るだらうし、齒ブラシを濡らさぬ日さへあるだらう。そうした友を見るここは自分を見るここでもある。

俺もよんごころなくやるストライキ

半里宇

「ごうしてストライキなきなさるの？」

「つき合ひさ。」

「ストライキまで」

「そうさ。五人も子ぎもを抱えてる連中のことを考えりや、俺だけがイヤだごも云へないぢやないか。」

手袋を女は叩きつけて去り

翠 夢

イヤです、イヤです、わたしはイヤです。女の怒りは解けるべくもない。

女は遂々去つた。しかし女が男に叩きつけたものは手袋にすぎなかつた。

鉛筆の女の手紙 憐れなり

犇郎

しごろもごろに鉛筆の走りがき。すて、置けば、此の世の  
ものではなさそうな空気が感じられる。

だが矢張り顔はごうでもよくはなし

梅月

結婚の條件に顔なんかごうでもよろしい。ミは云つたがホ  
ントにごうでもいゝのかミ訊かれるミ、ぐらつかざるを得な  
いね。自分が自分に嘘をつかなくてもいゝミすれば矢張りミ  
うでもよくはないのかな。

タイピスト器械の中へあくびをし

半象

華やかであるべき娘時代に貴社愈々御隆昌や高堂益々御清  
穆なき、いふ字をたゞいて其の日其の日を消してゐる退屈さ  
を諷した句である。「器械の中へ」が特によく利いてゐる。

落付いて見れば女給の低い鼻

夢一文

美給云ひ麗人云ふ。鼻の低くからう筈がないのに、そ  
れを發見したところに滑稽があり、皮肉がある。

蘇生して藝者の道をまた歩む

有爲郎

敢てその例を辻阪某の愛妓に求めなくてもい、だらう。生

きねばならぬ人間だ、ミすれば。

貨車の牛神戸を指して急ぐなり

新水

時刻は夕暮、ミしておこう。鐵道の沿線に立つてゐる、ミすぐ目の前をゴトン／＼ゴトン／＼、ミ轉がつて行く貨車の一つ／＼に牛が載せられてゐる。方向は神戸だ。彼等の運命は想像に難くない。しかも行く途を急いででもゐるやうだ。ああ、私達は？　ミ云つた諷刺句。

新世帯ポンプは僕が押ししてやる

花川洞

蒼白き郎君に申す。いつまでもいつまでもポンプを押ししてやりたまへ。

おばさんの前身スツバく喫ひ

呑風

矢ッ張り、そうだったか。ミ、みづからうなづいてゐる句  
「前身」ミ云ひ「スツバく喫ひ」ミ云うて、それ者の果ミす  
ぐに合點させるところが句のいのちであらう。



心得て女給手相を見て貰ひ

松映子

「君はまだく、苦勞するよ。君は既に片親を失つてゐるね」

「アラ、ほんごによくあたるわ」こ心得たものである。

混血兒のやうな名前で美容院

二 若

メイ牛山かな。マリヤ美容院かな。川柳家の神経もなか／＼こまかくなつて來た。

泊る妓の暫く見てる萩の雨

なみ江

大映しのやうに妓の脳裡をかすめて行つたものは故里の老  
ひたる父や母ではなかつたか。

對岸の灯が美しい生ビール

白 舍

市廳舎も、街路樹も、ミッろに橋を渡りゆく市電までもみ  
んな逆さに映つて夜の大川端が美化されてゐる時、生ビール  
の味はまた格別である。

今日はいゝ男さ黒の五つ紋

柳多良

新郎の歡喜が五つ紋に躍動してゐる。着想凡にして凡なら

ずいふ句だ。

慾のない人間にされあほにされ

矢 咲

あなたは慾がないからこゝ一應は褒めてもくれるが、それで  
いゝ氣になつてゐるこゝ、與へられる筈のものさへ與へられな  
い。

あるごっこにやあるなご寄附の話なり

東 魚

二圓三圓の寄附でも、こちさらには痛い、バサリミ投げ出した一千萬圓の寄附、それで本體にゆるぎがないミはイヤあるごっこにはあるものだ。

こんな川の水でも海へ行くのだけ

紫痴郎

落つれば同じ谷川の水、ちよろ／＼流れゆく川水からも  
儂なき人生を悟れこいふか。

保険屋のまだく喋る心算なり

港太郎

会社の資本金から、比率の他社より有利であること、掛金に對する利子がつくこと、息も切らずに喋べり抜く。大體こんな仕事は紹介がものを云ふのであるが、そうでないのは更に物凄しい。

借りる氣へ膝をくづせのまあ飲めの

柳秀

「ああ、よく來てくれた。近ごろはひまでな。まあ、ゆつくりしてくれたいぜ。君は飲ける口だつたネ」ミ斯うまくしたてられては云ひ出す隙がない。

のんでほし止めてもほしい酒をつぎ

霞 乃

機嫌酒ではあるが、若しか健康を害してはミ千々に心を碎  
くミころ、流石に女房の女房たる所以。

泊り客よう寝ましたご嘘を吐き

小太郎

可愛ゆくもない子ぎもの頭を撫でて見たり嘘をつかなくて  
いゝ時でも嘘をつくのが人間の弱點だ。

いゝ人が來さうな夜だ三味を抱く

夢一文

「君をまつむし、夜毎にすだく」ミヒク三味の音も女ごころか。

## 重役の英語違つたまゝ通り

駄々坊

昭和の聖代になつても、矢張りテケツだの、ステンシヨだのミ云ふ重役さんが相當にゐるらしいこゝには間違ひない。イギリスの何んぞか大學を出やうが、アメリカの何んぞかカレッジを出やうが、斯うした重役さんに追ひ廻はされるんだから、間違の訂正なんか思ひもよらない。

奉公に行く娘の肩を持つてやり

今 雨

なにも奉公に出さずとも外に方法がつかぬ事もなからうぢ  
やないか。腹違ひこいふものは水臭いもんだなあ。

冷やつこ女房へ缺けたまゝ残り

三太郎

變哲もない家庭生活。これが人生かも知れない。



泉岳寺しばらく人は死にたがり

川路

泉岳寺へ参詣した當座は、やつたな、うまくやつたな。俺だつてやるよ。大石は偉い。今なら爆弾三勇士かき考へたがる。

抱擁を與へた金でめしにする

宣騷

被壓迫階級の悲しむべきこの行爲も、馴れるにしたがつて社會のただ事になつてしまつたのだ。かくしても人間は飯を要求する。

戀の毘あの眼だらうか眼だらうか

路  
郎

ひきずられゆく男ごころ。ああ、ああ。彼の女の眼が映畫  
のそれの如く、クローズアップされて来る。



川柳評釋百句索引 (五十)

愛だなんて……………(五)  
逢ふて來たのに……………(六)  
朝顔の……………(元)  
味のない……………(三)  
一家團樂の後……………(二)  
移轉して……………(三)  
偽らぬ姿……………(三)  
一本の外は……………(三)  
一步一步……………(三)  
エキストラ……………(二)  
鉛筆の便り……………(元)  
お父さんが……………(三)  
男みな……………(二五)  
おちぶれて……………(三)

お叩頭した……………(三)  
お隣も……………(三)  
教へ子を……………(六)  
お困りでせうと……………(四)  
元且だ……………(二)  
借りぬ氣の……………(四)  
輝くや……………(二)  
かなしみ多く……………(一八)  
借物でないは……………(一八)  
かしわ屋の……………(三)  
借りて來た……………(三)  
片假名の……………(三)  
強盗が……………(四)  
看護婦の……………(五)

氣違ひが……………(二)  
靴磨……………(三)  
ケーブルの……………(四)  
月給は……………(四)  
こんな傷……………(九)  
此の人出……………(三)  
御近所へも……………(三)  
孝行をするは……………(元)  
ゴシツブへ……………(四)  
こうなされませと……………(四)  
産婆悠々……………(四)  
辭職して……………(八)  
仕舞風呂……………(二四)  
新藥を……………(二八)  
集金を……………(元)  
死ぬまいと……………(三)

車窓暖か……………(三七)  
出世して……………(三三)  
素晴らしい……………(四六)  
贅澤を……………(七)  
洗濯を……………(三三)  
扇風機……………(三三)  
セルを着て……………(二五)  
背の低い……………(四五)  
曾我廻家に……………(五)  
装飾に……………(一四)  
たばこぼん……………(一九)  
ちと古い……………(二八)  
女中より……………(四三)  
月あれど……………(二〇)  
妻の智慧……………(三九)  
定期の……………(二)

とう／＼醫者も……………(六)  
ドレス着て……………(三)  
どこへ行く……………(七)  
都會人……………(五)  
何もかも……………(一五)  
惱みに答ふ……………(一九)  
夏の海……………(元)  
七日過ぎ……………(四)  
寝る時間さへ……………(七)  
初日の出……………(六)  
鼻唄で……………(六)  
初戀の……………(五)  
ハンドバック……………(四)  
バス鐻の……………(四)  
獨りでに……………(九)  
人一人生む……………(三)

一と七日……………(五)  
閑人苦有……………(三)  
病人の……………(五)  
病氣には……………(五)  
福壽草……………(三)  
プロフキール……………(四)  
本復を……………(一六)  
本心を……………(一七)  
施しを……………(二)  
本當の……………(二七)  
ポートルアップ組に……………(四)  
ほゝ笑を……………(四)  
法律を……………(四)  
松の内……………(八)  
曼珠沙華……………(二)  
みな様の……………(七)

身の廻り……………(四)  
むかしむかし……………(二六)  
誘惑の……………(四二)  
四枚一組……………(三)

川柳名句評釋索引 (五十)

あの方と……………(五)  
敢て冒険を……………(五)  
挨拶の……………(六)  
雨へ耳……………(八)  
安閑と……………(一〇)  
混血兒の……………(三〇)  
あるとこにや……………(二五)  
色戀を……………(五)  
怒とは……………(五)  
一も金……………(八)

涎掛……………(三)  
幼稚園行を……………(四)  
我々の……………(七)  
我が影に……………(四〇)

暇乞……………(八一)  
石の門……………(八六)  
食客……………(九)  
一萬圓……………(一〇)  
いゝ人が……………(三六)  
家中を……………(七)  
運轉手……………(三三)  
うりぐひの……………(二三)  
馬の目と……………(三二)  
鉛筆の……………(二六)

大部屋の……………(五)  
女事務……………(六)  
大食ひの……………(六)  
思出へ……………(六)  
大阪の灯は……………(七)  
老の身の……………(七)  
大旦那……………(八)  
怨念を……………(八)  
親ほどに……………(九)  
玩具みな……………(一〇)  
妓一せいに……………(二七)  
白粉の……………(三〇)  
俺もよんどころなく……………(三五)  
落付いて……………(三七)  
おぼさんの……………(三九)  
樂隊の……………(五)

金送る……………(七一)  
肩車されて……………(六七)  
壁のしみ……………(六三)  
金ですむ……………(六二)  
買つてやる……………(二四)  
幸福の……………(二五)  
神様を……………(三三)  
借りる氣へ……………(三四)  
金言の……………(三二)  
機械一臺……………(七三)  
君雲を……………(二五)  
錦魚屋に……………(三三)  
完膚なく……………(六六)  
官邸の……………(六五)  
玄人で……………(六七)

頸筋に……………(九四)  
屑拾ひ……………(九四)  
嘘を……………(二八)  
靴下を……………(二三)  
貨物の牛……………(二六)  
玄關に……………(二六)  
今日は……………(三三)  
子に甘く……………(五四)  
氷ひく音……………(六六)  
子の寢言……………(九一)  
この邊へ……………(二七)  
心得て……………(三〇)  
こんな川の……………(三三)  
戀の罌……………(二九)  
皿の繪の……………(二五)

三味線も……………(二七)  
市電代……………(五七)  
状態の……………(五八)  
人絹の……………(六六)  
白いなあ……………(六九)  
七十を過ぎてても……………(七一)  
自轉車で……………(七五)  
借金は……………(八三)  
人口の……………(八二)  
春泥へ……………(六六)  
新店の……………(九九)  
閉めた戸が……………(九九)  
知つてるか……………(二八)  
シャツも着て……………(二四)  
新世帯……………(二九)

籠編み……………(一四)  
救ひとは……………(一六)  
水門は……………(一八)  
スキー服……………(一九)  
盛装へ……………(二〇)  
選挙違反……………(二一)  
船頭も……………(二二)  
泉岳寺……………(二三)  
底のない……………(二四)  
卒業の……………(二五)  
雑巾の……………(二六)  
蘇生して……………(二七)  
男装は……………(二八)  
疊替へ……………(二九)  
足袋を履く……………(三〇)

だが矢張り……………(三一)  
タイピスト……………(三二)  
對岸の……………(三三)  
貯金帳……………(三四)  
重役の……………(三五)  
電球を代へに……………(三六)  
手についた……………(三七)  
手袋を……………(三八)  
どのバスの……………(三九)  
ともかくも……………(四〇)  
演職の……………(四一)  
どこに行く……………(四二)  
トラツクに……………(四三)  
泊る妓の……………(四四)  
泊り客……………(四五)

夏の夜の……………(四六)  
何もかも……………(四七)  
泣きながら……………(四八)  
長襦袢……………(四九)  
何様の……………(五〇)  
荷造りの……………(五一)  
女房を……………(五二)  
二階借……………(五三)  
煉齒磨……………(五四)  
呑むだけが……………(五五)  
ノーパンで……………(五六)  
のんでほし……………(五七)  
葉巻一本……………(五八)  
訪問着……………(五九)  
肺だから……………(六〇)



一人酔ふて……………(一五)  
火鉢まで……………(一五)  
貧乏の……………(一九)  
晝線の……………(二七)  
人の非を……………(二七)  
貧乏の底に……………(二二)  
日の永さ……………(二三)  
冷やつこ……………(三七)  
婦人科へ……………(三六)  
文化村も……………(三三)  
冬の農家を……………(三九)  
踏切で……………(二二)  
兵隊の……………(三九)  
へつらつて……………(二八)  
ぼくは病人……………(七)

ボーナスへ……………(九二)  
箆迄……………(一〇〇)  
蝋まで……………(一〇三)  
保険屋の……………(一三四)  
奉公に……………(二七)  
抱擁を……………(二八)  
幕間を……………(八四)  
貧しさは……………(八九)  
店先の……………(五九)  
身の上話へ……………(二六)  
民事部に……………(二九)  
むづかしき……………(一〇一)  
目にもものを……………(八三)  
もう隣まで……………(三七)  
物賣は……………(三)

モウシヨンを……………(一〇〇)  
洋家具部……………(三)  
養うてあげると……………(七)  
揺れてゐる……………(三四)  
嫁の尻は……………(七)  
浴槽へ……………(二〇)  
よしんば……………(二八)  
よこれずに……………(三三)  
慾の無い……………(三三)  
來年は……………(三)  
立候補……………(七)  
六疊の廣さに……………(七)  
六錢を……………(六)  
腕力の……………(八三)  
患へば……………(二)

新川柳評釋



定價十八錢

滿洲・朝鮮・臺灣・神戶等

外埠定價八十八錢

昭和三十年十月十日印刷

昭和三十年十月十五日發行

著者 麻生路郎

發行人 麻生幸二郎

大阪西區玉出通三丁目三番六地

印刷人 中川幸五郎

奈良市北町二番地

發行所 大阪西區玉出通三丁目三番六地  
 不朽洞 九七五二屋茶下天路電  
 二九三〇三阪大替振

編輯 蔭路 蔭

# 川柳雜誌

(創刊 大正三十三年)

評論家・研究者・選者等斯界の最高權威を聚む  
句作したい人々・研究したい人々の好伴侶

★川柳の社會進出に燃として輝く本誌の歴史ノ

★川柳の妙味を識る唯一の近道としての本誌ノ 新進登龍門の本誌ノ

誌ノ

★多年連載せる「武玉川研究」は古典研究の至寶ノ 本誌は今や柳界の寵兒!

本誌定價一部三〇錢(税一錢)

半ケ年一圓八十錢 一ケ年三圓六十錢

大阪市西區江戸堀上通二丁目四六

昭和ビル二〇一號室

發行所 川柳雜誌社

電話土佐堀

三八三三  
一六一三  
一六六三  
四三三

振替口座大阪七五〇五〇番

滿洲・朝鮮・臺灣・樺太等の

外地 定價一部 三三錢

半ケ年 一圓九十八錢

一ケ年 三圓九十六錢

麻生路郎編著・柴舟漫畫

# 累卵の遊び

定價 壹圓  
特價 八拾錢  
送費 九錢

四六版一六〇頁・函入  
漫畫三十葉

川柳の妙味を骨を折らずに味つて貰ふつもりで噛んで碎いて摺り餌にしたのが累卵の遊びであるとは著者の序文の一節である。

阪大川柳會編纂・路郎序



額價 壹圓  
送費 六錢

大阪帝國大學の中で生れた異色ある川柳句集である。(四六版二〇〇頁) 本句集は非賣品であるが阪大川柳會に請ふて特に川柳愛好家のため頒布すること

麻生路郎序  
にした。残本僅少至急申込みあれ!

## 川柳句集 街の雑音

定價 五〇錢  
送料 六錢

作家生活十三年、黙々として吐き出した著者そのままの生きた姿、一讀再讀人生の底邊に觸

るものあらん。敢て薦む。

發行所 大阪市西成區玉出本通三の三六

不 朽 洞

振替大阪三〇三九二

---

覺

書

---